第５回日本海横断航路のあり方検討委員会　議事概要

１　開催概要

日　時：平成 30 年１月 23 日（火）14:30 ～ 16:30

会　場：新潟県庁　1103 会議室

２　議事要旨

(1) 新潟における本航路の位置づけについて

事務局から資料１により、日本海横断航路の位置づけについて説明。

＜委員からの主な意見＞

・新潟県のこれからの発展は、物流の拠点として栄えることを狙うべきで、物流の拠点化という議論の方が未来志向の建設的な意見が出ると思う。

(2) 採算性に関する詳細調査の結果報告について

事務局から資料２から資料６により、詳細調査の結果及び評価について説明。

＜委員からの主な意見＞

・アンケート等で調査した数字は、船社に働きかけるためのものという位置づけであり、採算は、その数字を参考に船社が精緻に行うものである。

・船社に働きかける場合は、核になる貨物についてより具体的な情報を持って話をすることになる。

(3) 事業スキーム・支援体制の検討について

事務局から資料７により、支援スキーム・支援体制について説明。

＜委員からの主な意見＞

・現状は、貨物の伸びが見込めるかの掘り下げをし、貨物量が増えていく可能性を追求していく段階ではないか。

・貨物の集荷は営業部隊を持つ船社に担ってもらうのが一番よい。新潟としては、使いやすい港づくりをする、港の利便性を高めるなど、船社に興味をもってもらえるような取組をすべき。

(4) 報告書の構成について

事務局から資料８により、委員会報告書の構成と論点の案について説明。

＜委員からの主な意見＞

〇報告書の構成

・報告書の冒頭で新潟港の拠点性に関して全体像を書いてから、日本海横断航路の位置づけなどを具体的に書いていかないとうまくまとまらないと思う。

〇日本海横断航路の意義・位置づけ

・航路の意義よりは位置づけとして書く方が、話がつながりやすい。

・この委員会で議論をしているのは極東ロシア航路なのだということをはっき

り書いた方がよい。

・日本海横断航路は重要であり、時間をかけてでも取り組んでいくべきもの。

・新潟港は拠点性向上のためのひとつの選択肢として日本海横断航路の可能性を継続して研究することの意義は否定できない。

・現実問題として乗り越えるべき各種ハードルがあり、（先行している）華南航路の誘致と併せ、ロシア極東航路の誘致として船社への働きかけを行っていくべき。

○日本海横断航路の採算性

・採算の計算は船社しかできず、船社が独自に精査を重ねていく。

・採算性の判断は船社がするものであれば、委員会として採算性についてどこまでかけるのか、という懸念がある。

・採算性の計算では、運賃単価も踏まえて収入見込みを出すことになるが、かなりぶれが生じるものであることは明記した方がよい。

・物の輸送が難しい状況の中、人、旅行の動きはこれからのことだろう。人についてはクルーズなど、別の形で新潟港利用し、発展させていければよい。

○事業スキーム・支援体制

・船を行政として持つのは適当でない、ということは明確に書くとよい。

・航路の開設は船社が主体であり、行政は主体者にも当事者にもなり得ない。行政がすべきことの全ては、航路誘致のための船社への働きかけである。

・自社が寄港していない地域には船社も力を入れにくいので、日本海横断航路について船社に働きかけるならば、ロシア航路を持つ船社への働きかけが現実的。

・荷主からは輸送コストが高いという意見があるようなので、輸送コストに関する支援ができると、船社としても動きやすくなるのではないか。

○当面の対応

・プロの意見を聴きながら、経済合理性に基づいて取り組んでいくのが大事。

・新潟経済にとって、新潟港の拠点性向上は重要なことであり、今後も拠点性を向上させる議論はしていくべき。

・新潟港の拠点性を高めるためにどのような航路がいいのかを考え、順番を付けてニーズの高いところから取り組むこととし、その中の一つの可能性として日本海横断航路を議論していくのがよいのではないか。

・詳細調査の結果からは収支は厳しいと見受けられるが、新潟港は開港 150 周年を控えていることもあり、何かしらの取組は進めていけるとよい。

・世の中の状況が変わるかもしれないが、情報収集、創貨、掘り起こし等は実際には相当難しい話であり、日本海横断航路は当面凍結としてはどうか。

・中長期的には発展の可能性があるのかもしれないが、現状では、短期的には直行便というのは現実的ではないと思わざるを得ない。

以上